

す。そして地方における都市と荘園とは狭い地理的關係にあるために、地方の豪族—上家達と都市商人とを同一の利害によつて結合させるので、ここに自ら独占的な豪族社会が形成される。こうしたものが、三—七世紀の間における旧式荘園の内容である。漢代の荘園はかかる旧式荘園の前期形態のものである。これに対し、八世紀以後の荘園は、荘戸とか佃戸とか言われる相当自活力の強い農民によつて構成され、荘園そのものが村落形態に近づいている。だから旧式荘園の封鎖的なるに對し、ここでは開放的である。こうした形の荘園が新式荘園である。

以上は著者の労作に表明された数々の貴重な研究成果の中から特に社会経済上の重要な問題を拾つたものであるが、上述の上家下戸制の一層具体的な内容についての究明は更に今後に残された大きな課題である。これについては資料的な制約も勿論あることだが、著者の漢代史に對する深い造詣から、今後は非展開して欲しいことである。と言うのは、漢代奴隸制論解決点の限界が、人身売買の有無、主人の人間の取扱の有無、更には生産の

主力が奴隸に在るか小作にあるかの問題も勿論重要なことであるが、小作・否下戸の社会的地位そのものの低さが、奴隸に比して何れ程の差があつたかが、問題を根本的に解明する鍵であると思われるからである。中國において、農民的土地所有の確立するのは、遙か後世のことであり、従つてそれ以前の農民、殊に代々上家に仕えた下戸農民が、上家からの経済的取奪に加えて、酷烈な人身取奪を受けていた事実を見るとき、その取奪の範圍限界が大きな問題になつて来る。私も漢代は奴隸制なりとの論に賛成するものではないが、さりとて、奴隸の取扱とも思われる程の人身取奪が多分に存在することを無視することは出来ない。従つて邑制國家時代の奴隸が漢代では解放過程にあつたことは慥かだが、漢代の小作制そのものが、奴隸の取奪から完全に解放されたものであるとは断言出来ない。考へ様によつては上家は奴隸を小作農民にすりかえることによつて、飽くなき取奪を遂げて行つたと見られる面もあるからである。種々の論議はこうした点から起る様である。中國のみならず、東洋の古代社会の特有の性格

を、一層明確にするためにも、上家下戸制の内容の究明は今後の大きな課題であらう。(名古屋大学文学部研究論集五。史学二。一九五三年)

——西村元祐——

Erich Otremba: Allgemeine Agrar- und Industriegeographie. (1953)

今はすでに古典的名著となつた「一般経済地理学」(一九二八)の著者として経済地理学界に今名高いR・リュトゲンスの編集により、このたび「土地と経済」Erd und Wirtschaftと題する大部な叢書が刊行され始めた。全五巻、只今その第三巻まで刊行されている。

各巻の概要を見ると、第一巻「経済生活の地理的基礎と諸問題」Die geographische Grundlagen und Probleme des Wirtschaftslebens。(一九五〇)は編者リュトゲンスの筆に成るが、内容的に、また構成の仕方について、旧著「一般経済地理学」と相通する点が

多い。即ち、第一部経済生活の自然的基礎、第二部経済人に対する植物界・動物界の意義、第三部経済の「Gesamtheit」としての人間、ここまでは旧著の構成をそっくり受け継いでおり、そして旧著はここまでで終つていたのであるが、新著では、空間と経済と題した第四部が新たに加わり、経済地域、経済景観等の問題が論じられる。

第二卷「世界経済の生産空間」Die Produktionsräume der Volkswirtschaft. (一九五二)  
も同じく編者自身の手になる。これは世界を熱帯雨林地域以下五つの大地域に区分し、更に海洋地域も加え、それぞれの自然と経済を叙述した総括的な世界経済地誌である。

第三卷「一般農業及び工業地理学」はエリヒ・オトゥレムバの筆に成る。これははじめ二〇〇頁が農業地理、あとの一〇〇頁が工業地理に宛てられ、最後に一〇頁程、農業景観と工業景観の統一という章が設けられている。

第四卷「一般商業及び交通地理学」Allgemeine Handels- und Verkehrsgeographie. と第五卷「土地形成者としての経済人」Der wirtschaftliche Mensch als Gestalter der Erde. と

は未刊。著者の名も知り得ない。

私は以上の中、特に第三卷、就中その前半の農業地理学の部分を取りあげて、その大要を紹介し、併せて若干の卑見を述べたいと思ふ。

第三卷第一部一般農業地理学は次の七つの章から成立つ。(因みに括弧内の数字は各章に割かれた頁数をあらわす) 第一章 農業地理学の立場・課題・発展・方法(一九)。第二章 農業空間とその形成要因(六〇)。第三章 農業的土地利用空間に於ける社会的構造(二二)。第四章 農業景観の構成要素(三八)。第五章 農業の経済形態(二二)。第六章 農業の地域性(一五)。第七章 若干の農業景観及び農業地域の比較の例(一八)。(尚第二部の「一般工業地理学」については紙数の関係上触れ得ないが、その構成の概要だけを参考のため示せば次の通りである。

——第一章 工業地理学の発展・立場・課題、第二章 人間の工業的活動空間の範囲、第三章 工業空間の社会的構造と構成要素、第四章 工業空間の経済的な配列の法則、第

五章 工業地域及び工業立地の比較考察、第六章 若干の工業地域及び工業景観の例)

第一章「農業地理学の立場・課題・発展・方法」は本書の云わば序章である。農業地理学の対象分野を厳密に規定することは困難であり、現実の農村社会に於て、労働空間と生活空間、農業景観と文化景観、従つて農業地理学と一般人文地理学とは取立て区別し難いのであるが、一言にして云えば農業地理学は農業によつて構成された地表空間の科学である。そして農業地理学の本質は地理学的思考と経済学的思考との結合の中にあるが、その際、農業の土地・気候に対する依存というような問題を乗りこえた時に始めて真の問題が始まるのであり、単なる地理的因果に止まらず、むしろ経済的諸關係によつて規定された農業空間の研究こそ農業地理学の究局の課題があるとする。農業地理学発達史の上では、ドイツにてはチューネン、エンゲルブレヒト、ヴァイベルの業績が高く評価され、イギリスの土地利用調査や合衆国のペーカー等に見られる実用的方法、フランスの極めてインテンシヴな方法が注目されている。

第二章「農業空間とその形成要因」では、第一に農業活動の地理的限界、即ち寒冷・乾燥・高度等に対する限界、第二に農業の自然的基礎、例えば気候・地形・水・土壌等と農業の関係を述べ、第三には作物・家畜の移動伝播（特に旧・新大陸間に於けるそれ）や混合形態、そして最後に経済的要因から農業の空間的配列を見る。即ち、収益通減の法則、チューネンの集約度法則、需要と供給との関係等が農業の地表に於ける分布に如何に影響しているかを指摘する。要するに農業空間成立の自然的・社会的諸条件が説かれるのであるが、構成は常套的で殊更に新味はない。しかし例えば農業活動の限界には現実の限界と可能的限界の両者があることを指摘するなど、農業の環境を絶対的制約的のものとして考えていないことが注目される。

第三章「農業的土地利用空間に於ける社会的構造」では農民の社会的階層について述べられる。農業空間の地域的分析に際しては、経営規模の機械的な大小だけでなく、農業社会的なタイプの比較、例えば経営に当る農民が旧大陸的な小農であるか、企業的な大農で

あるか、コルホーズ農民であるか等ということが開却されてはならぬこと、又経営規模は自然的・経済的・政治的要因によつて歴史的に変化するものであること、更に土地所有の地理学的意義、就中共同的土地利用の意義等を具体的に説いた後、世界を農業社会的観点から、西中欧・東欧・地中海地域・東南アジア・熱帯原住民農業・農業植民地プランテーション・新大陸の白人農業等に地域区分している。そして社会的構造の変化が農業景観にどのような影響を及ぼすかを補説する。

第四章「農業景観の構成要素」では農業景観の形態的特質を構成する諸要素について述べられ、本書の中ではさきの第三章及び後の第六章と共に最も興味を惹かれる部分である。要素の第一は農業的に利用された地表空間であるが、これは耕地そのもの及び土地利用の二つの面から取り上げられる。耕地としては所有の集中・分散や区画の大小・規則性の有無が中心となり、土地利用は移動牧畜（遊牧や移牧）・移動耕作（焼畑など）・恒久的単一利用（プランテーションや地中海果樹栽培など）・輪栽式農業（種々の輪作タイ

プが示される）、混合農業に分類され、広く世界各地に例をとつてそれらの景観構成上の意義が述べられる。構成要素の第二は居住形態、即ち集落・家屋であるが、ここでは散村と集村の問題、農村家屋の諸類型等が取り上げられる。純粹に集落地理学的な問題とは明瞭に自らを区別しつつ、居住形態の持つ経済的意義を中心として、例えば集村・散村の問題は農家から耕地までの距離ということが、経営規模の大小、所有地分散の程度等と共に論議され、また都市近郊農業の問題も此処で取り扱われる。最後に景観構成の第三の要素である道路についてやはり當農上の意義を中心に述べられる。

第五章「農業の経済形態」も長くはないが重要な章である。先ず主要経済形態を決定する概念として、経済目的の面から自給的か・市場向け生産か、経済観念の面から個人的か・共同のか、の四つを挙げ、それぞれの組み合わせによつて、例えば自給を目的とした個人の経済、市場を目的とした個人の経済：等に経済形態を分類しつつ实例を以てそれを説明し、更に経営システムの面から季節的

農耕、周年農耕、樹木農業、園芸農業等七つのシステムについて簡単に概要と分布を述べる。

第六章「農業の地域性」の章では農業地域及び農業景観の問題が主題となる。農業地域としてはエンゲルブレヒトやラウルのそれが例示され、地域設定に対して如何なる考慮を払うべきかが縷々述べられる。農業景観は農業的空間的研究にとつて基礎的な單元をなすものであるとされ、その *typical* の種々の観点が示されるが、ここではさきの第四章で扱われた景観の形態的側面ばかりでなく、構造的な側面がむしろ強調される。要するに此の章は農業の地域性、地域的特質を決定する究極的な因子をさまざまな角度から論じたものであり、本書の結論的な部分をなすのであるが、著者の見解は著しく経済的な観点を重んずる立場に傾いているようである。

最後の第七章「農業景観の比較の例」では若干の個々の例——例えばマグデブルグ近辺とヘッセン地方、カリフォルニア・東南アジア・スペインの米作景観比較、熱帯農業景観のタイプ等——を挙げて農業景観の比較観察

を行っている。記載は簡単であるが、景観把握の視点が具体的に示され、社会的・経済的な観点が強調されている。

以上「一般農業地理学」の構成及び内容について極くあらましを紹介したのであるが、以下、一読して特に気付いた点、感じたところを述べてみたい。

先ず感じられることは概念規定に対する、そしてさまざまな概念を農業地理学の全体系の中に位置づけることに對する執拗細心な努力である。例えば「集約度」というものを問題にするに際しても、それが内包する種々の概念を一つ一つ取り上げて比較吟味した後、農業地理学上、地域を構成する因子として大きな意義を荷うところのそれを求めて行き、また農地の所有規模と経営規模とは厳密に區別さるべきものであり、農業地理学上は経営規模という概念がより重要であることを数行に亘つて説いている。このような努力は農業地理学が未だ固有のターミノロジーに乏しいグレンツの科学であるだけに何よりも必要なことであらう。

しかし、このような概念規定に對する慎重さや、また各概念について必要以上に分類したり統合したりする試みは、却つて読む者をして何がその問題の中心点であるのか去就に迷わしめることがある。各々の章には勿論のこと、各節、更には各小節に至るまでそのはじめと終りには必ず序論及び結論が附されているが、それが往々にして、複雑な地理的事象をあまりに抽象的類型的な概念の中に解消してしまつていて嫌いがある。そして、随所に於て歴史的動態的考察を援用し、且つ強調しながらも、結果に於て著しく非歴史的な結論に陥つていくことが少くない。例えば所有と経営ということを概念的に峻別するの余り、小作制度とか共用地とかが両者の混交する変則的なものとなつて、その意義が見失われたり、また共有地即ち土地所有の共同的な形態という範疇の下に、熱帯の原始的農業に見られるそれとソ連に於けるそれとを包括してしまつたりするが如きがそれである。またあらゆる問題が究極に於てはすべて地域的な拡がりの下に理解されているのは至当であるが、その地域設定の単位が、例えば北西ヨ一

ロッパとか、東南アジアとか、新大陸とか云つた極めて広汎な概括的なものに終始し、そのため豊富に挿入された図の多くが、一つの部落、一つの農場というような小地域に於ける詳細な、極めて興味深いものであるにもかかわらず、本文の中にその図が充分に生かされていない憾みがあり、ざりとてまた世界的な視野に於て或る事象に關する分布範囲なり地域区分なりが描かれてもいないので、地域的考察が結局単なる類型化に止まつている場合が多いのは遺憾である。

しかし乍ら本書の出現は農業地理学の發展史上、まことに画期的なことと云わねばなるまい。本書の特色は、これまで合衆國の經濟地理学書に屢々見られたような、種々の生産物について夫々の世界的分布をドットマップで示しつつ、それが生産の自然的条件や世界の需給状況を順次述べて行くという、素材な物産誌の乃至商品地理的な行き方とは異つて、農業地理学上の諸問題を一つの体系の中に位置づけて行くこととしてゐることであり、一つのクンデとしての農業地理学の体系化が野心的に指向されていることである。そして

あらゆる論議を、嘗てリユトゲンスその他によつて唱導された交互作用理論のマンネリズムから解放するために、すでに述べたように、例えば農民の社会的構造の面や農業の經濟形態、農業景観など、能う限り多くの観点を把え、また従來のドイツ經濟地理学に欠けていたとされた社会的歴史的な側面を強調し、更にその他多くの類縁科学の成果を十分に取り入れることによつて、本書の内容はますます多彩なものとされている。考察・分析の視点を一つ一つ例をとつて掲げつつ、農業地理学の在り方をあらゆる方向から検討して、少くともその在りうべき骨格だけは十二分に示し、多くの問題に對する考察の可能性を示願したその功績は高く評價されねばなるまい。

——浮田與良——

## 最近の日本考古学の

### 発掘報告書

この一年間に出された報告書の数は、前年度に倍加し、戦前にも例を見ない程の數量に達した。これ等は最近の発掘專業の報告のみではなく、従來未発表のままおかれていた調

査の報告も含まれているが、とにかく考古学の研究を進めて行く上に最も重要な報告書がかくも多く出版されたことは喜ばしい。以下それぞれの報告書をとりに上げることにする。

文化財保護委員会

大湯町環状列石——秋田県鹿角郡

大湯町所在——

(埋藏文化財発掘調査報告 第二)

十和田湖からさほど遠くない秋田県鹿角郡大湯町に大きなストーンサークルらしいものがあつて、それが縄文式後期のものであるとの話を後藤守一氏からうかがつたのは昭和二年の初めであつた。それが一体何であるかという疑問は未だにとけないが、それがどの様なものであるかということが本報告書によつて十分に知ることが出来る。

本書は昨年紹介した『吉胡』に次ぐ同當発掘第二号として、昭和二六、七年に調査された大湯遺蹟の報告書で、調査経過と總括とを齋藤忠氏、地学的所見を藤岡一男、佐藤久両氏、紐石遺蹟を後藤守一氏、隣接地の発掘と同地出土遺物を入幡一郎氏、遺蹟の土壤の隣